

Desperate Remedies の構成

——「時」を中心として——

大 榎 茂 行

(1)

Hardy の最初の小説 *Desperate Remedies* は、1871年3月、75ポンドの保証金を出してやっと Tinsley 社から出版されたが、500部印刷されて370部売れたのみであった。¹⁾ *The Athenaeum* や *The Morning Post* から「力強い小説」とか「優れたできばえ」という好意ある批評を受けはしたが、*The Spectator* は、財産を持つ身分ある未婚の婦人が私生児を産むという大胆な構想を攻撃し、“a desperate remedy for an emaciated purse”だと酷評したし、²⁾ さらに「人間性についての知識を拓げる 独創的な人物が一人もない」³⁾と不満を述べている。*The Spectator* の前者の批評はともかくとして、後者は妥当な見解と言えよう。事実、この作品が現在論じられることは極めて少なく、後年の Hardy の芸術的特質を垣間見ることができるが、ほとんど論じるに足らぬものとして扱われている。例えば Irving Howe は、次のように痛烈な批評を加えている。

“The outer form of the novel is mostly nonsense, a farrago of incidents that require more ingenuity for their ordering than most readers will care to supply. . . . Inconceivable though it may be that the novel will ever be read by any large public, the occasional reader who, out of curiosity or accident, picks up *Desperate Remedies* will now and again be shaken by its coarse and indefensible power.”⁴⁾

1) Cf. Florence E. Hardy, *The Life of Thomas Hardy* (Macmillan, 1965), p. 88.

2) Cf. *Ibid.*, p. 84.

3) Cf. Irving Howe, *Thomas Hardy* (Macmillan, 1967), p. 24.

4) *Ibid.*, pp. 34—35.

F. E. Halliday は、Hardy 小説に共通する警句的評言、夜の火事、メロドラマ的な事件、視覚的なイメージなどを指摘しながら、彼本来の芸術性を示す“profound appreciation of the Dorset scene”に欠けると述べ、Arthur McDowall も、Cytherea の描写、教会の塔の上の人物の描写など“Each touch, fresh and delicate, is an item of significant vision new in prose.”と述べながら、「読者が抱く“curious sense”に彼の興味があったと指摘する。⁵⁾確かに Howe も指摘する通り、殺人、自殺、追跡、偽装工作、凄惨な死体処理、格闘、奇怪な夢、レスビアン的性行と実にミステリーとスリルに充ちた扇情的な出来事の連続であり、そのためか、人物は生きておらず、まさに単なる“pegs”⁶⁾に過ぎない。このような異常な出来事を列挙すると、まさしく「様々な出来事の寄せ集め」であるが、これらが引き起こす好奇心と緊迫感、ゴシック小説にも似た戦慄は確実に読む者を捕えて離さぬ面白味があり、虚構を虚構としてそのスリルを楽しむ現代の読者には、Hardy のいわゆる“hygienic purpose”⁷⁾という機能を十分に果し得るものと言えるのではなかろうか。そして何よりも興味を引くのは、個々の出来事や描写に後年の作品に見受けられる特徴が見られるだけでなく、それらの出来事を統一している基本的構成、つまり *The Mayor of Casterbridge*, *The Return of the Native*, *Tess of the D'Urbervilles*, *The Well-Beloved* などに発展・展開される形而上学的構成の原型を見ることができることである。そこで本論では、

5) Cf. F. E. Halliday, *Thomas Hardy, His Life and Works* (Adams & Dart, 1972), pp. 48—52.

6) Cf. Arthur McDowall, *Thomas Hardy—A Critical Study* (Faber & Faber, 1971), pp. 47—48.

7) Halliday, p. 52.

8) Hardy が“The Profitable Reading of Fiction”において小説の一つの読み方として述べたもので、彼は‘Nevertheless, to get pleasure out of a book is a beneficial and profitable thing, if the pleasure be of a kind which, while doing no moral injury, affords relaxation and relief when the mind is overstrained or sick of itself.’と述べている。(Harold Orel, *Thomas Hardy's Personal Writings*, 1966, pp. 110—111)

作品を支える基本的構造は何であるか、その面白さは何かを考察し、Hardy が自らの道を模索する過程の一つとしてその特徴を捕えてみようと思う。

(2)

この作品は、出版されることのなかった最初の作品、*The Poor Man and the Lady* を足掛りに世に出たと言ってよい。貴族、社交界、中産階級の俗悪さ、近代キリスト教、当時のモラルなどを痛烈に攻撃したその作は、革命的とは言えないまでも社会主義的改革の情熱に燃えた作品であったため、MS を読んだ Meredith がその攻撃の鋒を緩和するか、出版を思い止まるように勧め、⁹⁾ “a novel with a purely artistic purpose, giving it a more complicated ‘plot’” を書くように助言した。これを文字通り受けて書いたと言われるのがこの *Desperate Remedies* である。ドーセットの田舎から出てきた Hardy が、Macmillan, John Morley, Chapman などを知り、特に文壇に確たる地位を占める Meredith などの助言に対して過大な敬意を払ってその助言を受け入れたことは充分に納得できるものである。また全財産を集めても¹⁰⁾ 123 ポンドという中から75ポンドの保証金を出してまで Tinsley の出版契約に応じたことは、Meredith の助言に従うことによって “best-seller” を狙い¹¹⁾ 世に出んとしたものと考えられる。その背景には、Tryphena に代わる弁護士¹²⁾ の娘、St Juliot の Emma Gifford との交際があり、自分の地位の低さ、貧しさから結婚に踏み切れなかった苦悩が働いていたようである。この作品で建築家 Edward は世に出るためには次のことが必要だと言う、

“A certain kind of energy which men with any fondness for art possess very seldom indeed — an earnestness in making acquaint-

9) Cf. F. E. Hardy, *The Life*, p. 62.

10) Cf. Howe, p. 32.

11) Cf. Halliday, p. 52.

12) *Ibid.*, p. 45.

ances, and a love for using them. They give their whole attention to the art of dining out, after mastering a few rudimentary facts to serve up in conversation. . . .(p. 47)¹³⁾

この言葉をそのまま Hardy にあてはめることはできないかもしれないが、¹⁴⁾ 上述の事情を考え合わせ、またこの作品の彼の目的が “simply to construct an intricate puzzle” であったと Macmillan に語ったことから、¹⁵⁾ 彼本来の人生に対する深い洞察から、あるいはその芸術的表現の強い衝動からこの小説を書いたというよりも、むしろ読者大衆におもねり、如何に世に出るかに主要な関心があったと想像することができる。そしてその方法は、「より複雑な構成」により「複雑な謎」を作り、それによって尽きることのない好奇心、サスペンス、ぞっとする戦慄を読者に与えて興味を引くことにあったように思える。

物語は二つの世代の主要人物 Ambrose Graye と Cytherea Aldclyffe, Cytherea Graye と Aeneas Manston とを中心とする人間関係から成っている。一見ばらばらに放置されているこれらの人物が、ある関係のもとに結びつけられて行くわけであるが、その過程で秘められた関係が謎を構成し、その謎を解いて行くことによってその関係が明らかにされるというものである。したがって Beach も指摘するように、この小説は前半がその謎の設定であり、後半はその解明の過程から成っていると言える。¹⁶⁾

主人公 Cytherea Graye は父が後に結婚した女性との間にできた娘である

13) *Desperate Remedies* (Macmillan, 1960, The Greenwood Edition), p. 47. 以下本文中の引用に付したページ数はこの版による。

14) Halliday はこの作品には Hardy の自伝的要素が多いと述べ、Edward Springrove の意見は Hardy の意見でもあると述べている。(Cf. Halliday, *Thomas Hardy*, p. 47)

15) Halliday, p. 52.

16) Cf. J. W. Beach, *The Technique of Thomas Hardy* (Russell & Russell, 1962), p. 23.

が、父 Graye の死によって27年昔、父に母とは別の恋人があり、ある事情で別れ、そのために生活がすさんだことを発見する。ここに主要な一つのミステリーが設定される。つまり父の恋人は誰であるか、何故別れたかということである。兄 Owen と Budmouth に移った Cytherea は、Knapwater 荘園の今は45・6才の女主人 Aldclyffe に話相手として雇われる。彼女の持っているロケットの中の写真から、その Aldclyffe が父の恋人であったことを知って驚く。しかし何故父と別れたかは最後までミステリーとして残る。一方 Aldclyffe は、財産管理のためといって地頭を公募するが、秘かに Manston が応募するように策謀し、弁護士の推薦を無視して Aeneas Manston を雇う。その奇妙な選び方から Aldclyffe と Manston の間にどんな関係があるのか、何故独身を条件に彼を選んだのか不可解なミステリーが生じる。

もう一つの謎は Manston に纏るものである。独身を装っていた彼には、実は嫌気がさして別居している Eunice という妻がロンドンにいる。Cytherea を愛しはじめた彼は妻が邪魔になる。彼を訪ねて来た Eunice は偶然の行き違いから夫に会えず Three Tranters Inn に泊るが、そこが火事になり姿を消す。彼女の時計と鍵と少量の骨が見つかったことから検証の結果、彼女は焼死したことになるが、果して死んだのであろうかという新たなミステリーが生じる。その後 Cytherea は兄の友人で建築家の Edward を愛していたが強引な策略に負けて Manston と結婚する。その直後、駅の赤帽 Chinney は火事の後 Eunice に会い、Manston の妻は生きていと証言する。だとすると Eunice はどうなったのかと謎がまた生じる。

今一つの謎は Manston の妻についてである。妻が生存していることになった彼は妻を探す広告を出す。三度目の広告でやっと妻が現れるが Edward は眼の色が異なると知って彼女を疑う。もし Eunice でないとすれば彼女は誰であろうかという疑問が生じる。これに付随して様々な怪奇な出来事や行動が連続する。このようにこの小説はまさに不可解な謎の累積であり、得体の知れない “mysterious cloud” (p. 129) に包まれ、それぞれの人物と行動は “some secret bond of connection” (p.129) で結びつけられている。そし

てこれらの秘密や行動の動機を解こうとして次々に生じる好奇心こそこの作品の興味をつなぐ主要な武器の一つである。つまり、これらの謎が分らないことが読者をサスペンスの状態に置き、その累積が異常な興味を喚起し、作品を特徴づけている。

次にこうして掻き立てられたサスペンスは、Manstonの妻が焼死したのではないという証言を契機に Manston への疑惑が生じ、再び現れた妻が本当の Eunice かどうかという Edward と Owen の真相追究のスリルに転じて行く。Casterbridge で焼死の検証記録の再調査をする Owen とそれを隠れて尾行し手をうつ Manston。Eunice のロンドンの下宿を訪ね、写真その他の証拠を探す Edward とそれを尾行し Owen に送られた 写真を すり替える Manston。愈々追いつめられて真夜中に死体を埋めかえる Manston と尾行する探偵、Aldclyffe、偽の妻 Anne Seaway の三人の情況。この追跡する者と追跡される者との関係の生み出す緊迫したスリルは、まさに興味と興奮を倍加する。最後に捕まった Manston は、火事の後現れた Eunice と口論し殺したこと、焼死を偽装するために時計と鍵を取り、墓地で拾った骨と一緒に焼跡に捨てたこと、その後の妻はかつての家政婦であったことを告白して自殺する。それにショックを受けた Aldclyffe も、Manston は自分が Grayeを知る前に知り合った将校との子供で、生まれるとすぐ捨て、その成長を陰ながら見守っていたこと、そのために Grayeと結婚できなかったこと、そこで自分の夢を果すために Graye の娘 Cytherea を引きとめ、自分の息子 Manston と結婚させる積りであったことなど総てを告白して同じく死んで行く。こうして最初に設けられた謎は解決され、最後に Cytherea と Edward は結婚する。

このような構成上の謎から生まれるサスペンスと、それを解こうとして追跡するスリルは読者を魅了するが、その構成を包んで一層効果的にスリラー的恐怖を掻き立てるのは Hardy の優れた描写力であろう。例えば、Aldclyffe の父の死と時を同じくして Cytherea が怪奇な物音を聞く状況を見てみよう。場所は暗黒の寝室、外には細々とした月光と静寂がたちこめている。午

前2時を過ぎた真夜中である。第一に聞える音は遠くに響くかすかな低い滝の音。水車の軋る音が土牢で飢えかかっている囚人を思わせる。続いて何とも言えない怪奇な音が聞える。“... it seemed to be almost close to her——either close outside the window, close under the floor, or close above the ceiling” (p. 99) と捕えどころがない。犬の遠吠えに続く第三の音は，“It was not like water, it was not like wind; it was not the night-jar, it was not a clock, nor a rat, nor a person snoring,” (p.99) である。この暗黒、静寂、何処からとも知れず聞える不気味な音は、捕えられぬために聴覚を異常に緊張させ、類似した単音を重ねるその描写は読者にもその音を聞かせる思いがし恐怖の底に突き落すのである。CythereaがはじめてManstonの家を訪れた時豪雨になる。外には雷鳴と稲妻が走り、小さな部屋には彼の弾くオルガンの激しい音が反響する。

... the tones of the organ, which reverberated with considerable effect in the comparatively small space of the room, heightened by the elemental strife of light and sound outside, moved her ... The varying strains—now loud, now soft; simple, complicated, weird, touching, grand, boisterous, subdued; ... (p. 155)

この音は Cytherea を呪文で縛ったように彼女の自制心を失わせる。こういう音に対する Hardy の感覚の鋭さとその見事な描写による効果は、*Far from the Madding Crowd* の冒頭の Norcombe Hill を吹き抜ける風の音、Oak が Bathsheba と協力して麦に覆いをする時の稲光りと暴風雨に、*The Woodlanders* で Giles の植えた松の苗木に当る風の音に辛い一生を始める溜息を聞きとる Marty に、その他 *The Return of the Native*, *Tess of the D'Urbervilles* など到るところに見られるが、その激しい音から些細な音までも聞き分ける Hardy の感覚は、この第一作においてもその恐怖と戦慄の効果を見事に表している。

一方、15分・20分・30分と刻々の時と共に燻っていた煙は赤い炎となり、遂には Three Tranters Inn を真赤な火で包み、向いの教会を黒々とした夜

空にくっきりと浮び出させ、その中を泣き叫び、傷まみれになって走りまわる人々の光景は、視覚に強く訴え、“whim of Nature” (p.193) を思わずに相応しい。

Manston が埋めた 死体の袋を真夜中に掘り起こした探偵が、その袋に附着した女の髪毛を発見した時の光景の恐しさはどうであろう。

He put his hand upon it; it felt stringy, and adhered to his fingers. . . . He raised his hand to the glass, and they both peered at an almost intangible filament he held between his finger and thumb. It was a long hair; the hair of a woman. (pp. 417—418)

夜の森の中、ぼんやりと照らす一条の明り、ねっとりと指に絡みついて浮き出た女の髪の毛。まさに恐怖の悪寒が読者の背筋を走るであろうし、一度隠した死体を偽装するために再び取り出し、時計と鍵を取って壁の中に再び埋め直したり、頭蓋骨を求めて墓地をさまよう Manston の姿には鬼気迫る凄惨さがたちこめる。聴覚、視覚、触覚を縦横に駆使して描く情況は、その構成と共にスリラーの圧巻と言えよう。

(3)

この小説では、それぞれ過去の秘密を持った人物たちが、それぞれの意図を隠して集まり、そこに謎が構成される。それが「油断も隙もない自然の力」“the treacherous element” (p. 194) によって破綻をきたし、それを繕おうとする “Desperate Remedies” が、鋭敏な感覚で捕えられた情況描写に支えられて異常なまでの戦慄を引き起こす、こういう構成の工夫を凝された作品である。

では、このような複雑な要素を統一しているのは誰であろうか。一応物語は Cytherea Graye を中心に展開する。「茶色の切株畑に咲いた一粒の赤い芥子」のように魅惑的な美しい容姿、優雅な身のこなしを湛えた18才の彼女は Edward を魅了し、Manston を引きつける。彼女は Edward との恋で “a pleasure from his touch” (p. 45) を楽しみ、Manston とはじめて会って服が触れるだけで “her dress is part of her body” (p.151) のように胸の

高鳴りを覚え、雷鳴とオルガンの激しい音に攪乱されて唇を開くという官能的な女性である。これは後に、Clare に抱かれて水溜りを渡る時に頬を燃えたてる Tess、乳を搾る時に Clare に抱擁されて “momentary joy, with something very like an ecstatic cry”¹⁷⁾ にひたる Tess にも見られる。Tess はある意味でその sexuality のために苦悩するが、その本能的生命力を燃焼させている。しかし Cytherea のそれは断片的な特性に過ぎない。Millgate も “Cytherea is an embodiment of beauty and sexuality . . .”¹⁸⁾ と指摘してはいるが、これが彼女の生への欲求と行動へ進展することなく終わっている。Cytherea は本質的に受動的、消極的であり、置かれた環境の犠牲者として恐れ慄き、尻込みするばかりである。Aldclyffe との不思議な出会いに「驚嘆し」、Edward と別れても「惨めな目差し」を浮べるだけであり、気の進まぬ Manston との結婚にも「常識」から判断した「英雄的な自己犠牲」から承諾してしまう。二重結婚の疑いを知って「恐れ慄き」、詳細を明らかにすることも「自分の義務ではない」と諦めてしまう。“Yes, we desire as a blessing what was given us as a curse, and even that is denied.” (p.55) と最初に Owen に語る彼女の言葉はそのまま彼女の一生である。したがって彼女は読者の強い感動とか共感を得ることもないし、plot を統一する中心人物とはなり得ない。

Manston は美男で知的な鋭さはあるが、厚顔で動物的である。Cytherea に Edward という恋人がいることから一層征服欲に駆られ、妻を殺ろしてからは一層その “animal” 的本質を現し、種々の奸計を企て執拗に Cytherea を追う。“I ’ll get her, if I move heaven and earth to do it !” (p.245) と追う姿に悪党の魅力が与えられて行くが、殺人が暴露されかかると、“ . . . to let matters take their course . . .” (p. 321) と萬事を事の成り行きに任せ、ただ繕うだけの小細工を弄し、替玉の妻で満足しようとする。こうなる

17) *Tess of the D’Urbervilles* (Macmillan, 1963, The Greenwood Edition), p.193.

18) Michael Millgate, *Thomas Hardy—His Career as a Novelist* (The Bodley Head, 1971), p.32.

と悪党の興味は色褪せてしまい、結局悪あがきの小悪人になり、Edward や Owen などの人物の中に没してしまう。

Aldclyffe は Cytherea の艶麗さに比して壮厳さを湛え、誇り高く、傲慢であり、そのために自分の意のままに Cytherea と Manston を動かしているが、Cytherea に自分が父の恋人であったことを知られ、Manston に過去の秘密知られると全くその力は衰え、哀れな過去の亡霊の姿に返る。

このように、それぞれ個性的な特徴は見受けられ、Millgateの指摘する¹⁹⁾ように確かに人物創造に当初はかなりの注意が払われているが、結局誰一人、自分の存在の意味を見つめ、人間関係の喜びや、あつれきを考える者はいない。つまり性格や外観は与えられているが、内面や、人間関係を考察する力とは与えられていない。したがって作品を統一する偉大な人物は存在せず、人生の機微を訴える人物もいない。かといって複数の人物が描き出す広範な人生の真の一面も照観されることはない。こうして作中人物は結局、サスペンスとスリルを生み出す plot に埋もれてしまっている。

(4)

以上のようにみると主人公らしい人物はなく、偶然の出来事を利用しながらミステリー、サスペンス、スリルを作り上げ、読者に面白い物語を語る story-teller としての Hardy の姿が浮び出てくるのであるが、果してそれだけであろうか。確かにこの作品は謎の設定とそれに対する解決の過程から成っている。だが、様々な人物が作り出すこれらの謎の関係が、実は作品全体の構成を決めているといってよく、後半はそれらが結びつけられればよい。したがってこの前半の謎を如何に構成するかがこの小説の基本であると言える。Gregor は「物語、もっと正確に言えば plot は、Hardy の形而上学の模写である²⁰⁾」と述べているが、この前半の構成に後の多くの作品に見られる Hardy の形而上学として展開される構成の原型を見ることができることに

19) *Ibid.*, p. 31.

20) Ian Gregor, *The Great Web* (Faber and Faber, 1974), p. 27.

注意しなければならない。

既に述べたように、物語は過去と現在の世代とに属する人物から成り、表面上 Cytherea と彼女をめぐる二人の男性 Edward と Manston との愛が展開される。だが彼らは実は操り人形に過ぎない。彼らを操っているのは Aldclyffe である。Aldclyffe は与えられた性格から見ても、また作品の前半だけで後半は殆ど目立った行動をしないことから主人公にはなり得ないが、彼女は Hardy の形而上学の象徴として plot を進める原動力になっている。彼女は世代の異なる過去の存在である。にもかかわらず彼らの行動を支配する隠然たる力を持つ陰の存在として位置づけられている。Aldclyffe が Cytherea を自分の話相手として手元に引きとめ、Manston を呼び寄せ、Cytherea と Edward の恋の邪魔をし、Cytherea と Manston を結婚させようとする。こうして呼び寄せられた人物を次に支配するのは Manston である。彼は自分に妻があるという過去を隠しており、Aldclyffe の弱点——過去の秘密——を知ることによって彼女の代行者となり、彼女の意図を利用し、妻の殺害を偽装し、他の人物の行動の誘因となる。しかし彼の行為の背後には彼自身が隠している過去と、Aldclyffe の子供であるという宿命的な過去が付随している。したがってこの作品の plot は、Manston の過去を含めて Aldclyffe に象徴される過去の流れと現在の流れとの並行する二つの「時」を基盤として成立している。だが過去は詮索されない限り現在には知られない存在であり、だからこそ埋もれた過去に現在では不可解と思える謎を自由に仕掛けることができるわけで、この物語のミステリーは実はこの Aldclyffe の過去に総て源を発すると言える。

この現在と過去の流れが並存することが構成の基本である。次に重要な問題は、この二つの「時」の流れがどのように相互に関連を持ってくるかである。Graye(過去)とCytherea(現在)の関係、Aldclyffe(過去)とManston(現在)の関係は血縁関係によって徐々に明らかにされる。だがCythereaとManstonの関係は、GrayeとAldclyffeとの過去の関係から導かれるものであり、それはAldclyffeを通して行われる。だからAldclyffeとCytherea

との出会いこそ、本当に隠された過去と現在の流れの相互関係を説明する重要なものと言える。

第一章の Graye と Aldclyffe の遂げられなかった恋の関係は、Graye の死を契機に27年の埋れた過去の時を経てその子供 Owen と Cytherea によって掘り起こされる。遺品を見て父の「過去に対する弁明」(p. 12)の姿を見たCytherea は兄に次のように言う。

“And once mamma said that an excellent woman was papa’s ruin, . . . I wonder where she is now, Owen? . . .” (p. 13)

Budmouth に移った兄妹は、Owen が偶々泊った踏切り番の男の話から父の昔の恋人の名前がやはり Cytherea だと発見する。Owen は「単なる偶然の一致」(p. 39)だと言うが、Cytherea は「一種の直感」(p. 39)からそうだと思ひ込み、過去への興味を一層かき立てられる。職を求めていた彼女は莊園の女主人 Aldclyffe と住むことになるが、Aldclyffe のロケットの中に自分の父、若き日の Graye の写真を見つけ “a romantic and hidden stratum of the past hitherto seen only in her imagination” (p. 80) が明らかな姿を取って現れたことに慄く。Aldclyffe も “Graye” の “e” が落ちた形で雇ったので気付かなかったのだが “ . . . her father’s features were distinct in her.”(p.83)と驚く。これは *Tess* において、祖先の肖像画を通して“ . . . her fine features were unquestionably traceable in these exaggerated forms”²¹⁾とその過去からの流れが現在にも辿られ、現在を過去から切り離すことができないことを示しているのに通じるもので、Hardyの基本的な見解の一端を示している。したがって Cytherea と Alaclyffe とのこの出会いは、現在と過去の出会いであり、過去の歴史が Cytherea に明確な形をとってのしかかってきたものであり、Aldclyffe は「過去の鉾脈」の具象化されたものと言える。だから第一章の Graye と Aldclyffe との不可解な恋の破綻という挿話は「過去の鉾脈」の設定であり、ミステリーの源として、また構成上の基礎として極めて重要である。

21) *Tess*, p. 277.

Hardy は “coincidence” を作品に多用し過ぎるとよく非難される。この Cytherea と Aldclyffe の出会いも Owen が言うような「奇妙な偶然の一致」(p. 168) の一つであろうか。Hardy は Cytherea を通して次のように言う。

‘Yes, one will occur often enough—that is, two disconnected events will fall strangely together by chance, and people scarcely notice the fact beyond saying, “Oddly enough it happened that so and so were the same,” and so on. But when three such events coincide without any apparent reason for the coincidence, it seems as if there must be invisible means at work. . . .’ (pp. 168—169)

ロンドンでの Aldclyffe の過去を知った男がこの地にいたこと、そのために父の恋人の名前が自分と同じ Cytherea ではないかと思ったこと、Cytherea がその Cytherea Aldclyffe と住むようになったこと。このように三つの出来事が重なると、もう「偶然」ではなくて “designs of Providence” (p. 169) であり, “invisible means at work” があると Hardy は説明する。つまり “coincidence” と言われるものは、実は Hardy にとっては過去と現在とが潜在的に当然もっていた関連性の接点なのである。²²⁾そしてこの潜在的関連性が徐々に現れる時、それを知らない現在の者には “designs of Providence” が感じられるのである。だから、この一見偶然に見える二人の出会いは、実は Hardy の過去の「時」の力を示す形而上学の一つの象徴であり、また plot を展開する一つの技法としても正当化されねばならない。したがってこの出会いに至る過程は種々の形をとって準備される。

Cytherea が父の恋人の名前を知るようになった最初の出来事を Hardy は

22) この点について Hornback は次のように述べている。

“In the later novels . . . coincidence will be made legitimate, will almost be normalized, by the metaphoric juxtapositions of past and present which produce intensified time and timelessness. . . . Cytherea and Owen discuss the possibility of coincidence in normal life in Chapter 9.” (Hornback, *The Metaphor of Chance*, Ohio University Press, 1971, p. 42)

“ . . . a circumstance which, slight in itself, took up a relevant and important position between the past and the future of the persons herein concerned.” (p. 35) と述べ、Cytherea がはじめて Aldclyffe に会い、一度は不採用と言われたが、その時、“Something, she knew not what, told her she had not seen the last of Miss Aldclyffe.” (p. 62) と彼女は感じたとし、二人の間にある神秘的な交感が作用したことを示している。そして二人が一緒に住むようになったことについては、“ . . . the strange confluence of circumstances which had brought herself into contact with the one woman in the world whose history was so romantically intertwined with her own.” (p. 87) と説明する。

さらに、この潜在的関連性が示されることに加えて注目すべき点は、過去が現在を支配する力を持っていることが示されることである。Cytherea は Aldclyffe の父の死の時に怪奇な音を聞く。その音は彼女に “another call to her not to forsake this woman [Aldclyffe] so linked to her life” (p. 109) と感じさせ、Aldclyffe のもとを去ろうとしていた彼女は、Aldclyffe のもつ過去の力に従わされるかのように続いて生活を共にすることになる。このように全く別の存在であった二人は、「徐々に一つの溝にはまり込んでくる」(p. 109) ことになり、離れ難い絆で結ばれる。

このことは Manston によっても示される。彼もある意味では全く別の世界から Aldclyffe という過去の力に引きつけられたのであるが、彼と Aldclyffe の関係は Cytherea と Aldclyffe とのそれとは異質のものである。彼は妻 Eunice を通して彼女の過去の全貌を知り、自分が彼女の分身であることを知っている。だから彼と Cytherea とを結婚させようとした Aldclyffe の意図を知っている彼は、彼女に代って Cytherea と結婚する。Manston と Cytherea との結婚は Aldclyffe の過去の果されなかった夢の具体的な現れである。Aldclyffe に “My love must be made your affair.” (p.215) というように彼は Aldclyffe の延長線上にあり、“spell-bound” のように Cytherea と結ばれる。だが彼が妻を殺したことにより、やがて Cytherea も失い破滅

して行く。結局彼自身も Aldclyffe の掌中にあったのである。彼は自殺するにあたって次のように遺書を書き始める, “Having found man’s life to be a wretchedly conceived scheme, I renounce it, . . .”(p.432)。Aldclyffe との「共通の秘密」(p.438)に結びつけられた彼は、人生という下手にもくろまれた筋書を演じながら “a mocking tormentor” である “Providence” (p.433) によって自分の自然な姿、つまり過去の流れの中に身を没して行く。彼は次のように遺書を結ぶ。

I am now about to enter on my normal condition. For people are almost always in their graves. When we survey the long race of men, it is strange and still more strange to find that they are mainly dead men, who have scarcely ever been otherwise. (p.438)

Manston にとっては過去の歴史への回帰——死——こそが彼の「正常な姿」なのであり、人もみなそうなのである。Aldclyffe の「甘美な夢」(p.442)も彼の死と共に壊れ、彼女も過去の流れの中に沈んで行く。

Hornback は「Hardy の作品においては過去と現在が同じ磁極に向って絡み合って行くが、これが基本的な plot である²³⁾」と述べているが、この作品は、そのことをもっともよく例証するものであり、このことは他の作品の場合も同じと言える。例えば *The Mayor of Casterbridge* も構成は非常によく似ている。同じように最初に妻を売るという異常な出来事を基底として18年後から物語が展開される。その過去の出来事は、その後の Henchard に天罰を下すかのように執拗に彼を捕えて離さず影響を及ぼすが、そのたびに過去に対する責任をとり、裏切られ、反撓して行く。その過去に対処する仕方の中に彼の個性の偉大さと哀れさが浮き彫りにされて来る。²⁴⁾ *Tess of the D’Urbervilles* においても、Tessの苦しみが宿命的な過去の時の絆であることに気が付き、それを逃れようと腕く時、その苦しみの腕きは悲劇の域にまで高

23) Hornback, p. 43.

24) 拙稿, 「*The Mayor of Casterbridge* —その plot と「時」の問題について」(「甲南女子大学英文学研究」, 第9号, 昭和47年) 参照。

められ、読者に強い感動を与えている。²⁵⁾ 彼らは過去の「時」に捕われている人物であるが、それに気付किながら少くともそれに屈せず自分に相応しい人生をまっとうしようと奮闘する。この宿命的な過去が、それに対応する人物を優れた人物へと高め、逆にそういう人物を通して過去の宿命的な絆が鮮明に浮び出る。この過去と現在の人物の相互関係が作品の構成になり、Hardyの形而上学となっている。この *Desperate Remedies* でも Aldclyffe が過去の流れとして位置づけられ、Cytherea・Manston が現在の流れとして存在し、この両者が相互に如何に関連性を持っているかということが Aldclyffe と Cytherea の 出会いを通して、また Aldclyffe—Manston—Cytherea の 関係を通して明らかにされており、その意味で Hardy の後の優れた作品に見られる構成の原型を見ることができると言える。だが、この場合、過去の時の持つ宿命的な絆が、それに対応するに充分な人物を得ておらず、つまり両者の関係が対等な関係で融合されていず、したがって形而上学的な意味をもった構成のみが一方的に現れてしまっている。逆の表現をすれば、plotを複雑にして面白い物語を作り上げようとした中に、Hardyの小説を特徴づけるこういう形而上学が既に粗雑な形ではあるが存在していたと言うべきかも知れない。

以上述べたように、この小説は、あまりにも複雑な人間関係と謎、扇情的な出来事の連続、plotのつなぎ役的な人物などが多いために欠点が多いが、その構成の背後には上述の Hardy の基本的な形而上学を見ることができ、またそれらの生み出す戦慄の感興は、少くとも作品を一気に読ます面白味を充分にそなえており、“*Desperate Remedies* remains a better novel than is commonly assumed, . . . ”²⁶⁾ と述べる Guerard の言葉に共感できるものである。

25) 拙稿、「*Tess of the D'Urbervilles* の構造と Fatalism」(「甲南女子大学研究紀要」, 第10号, 昭和48年) 参照。

26) Albert J. Guerard, *Thomas Hardy* (Harvard University Press, 1968), p. 50.